

石川県小松市松岡町方言における形容詞・形容動詞の活用

小西いずみ

1 はじめに

本稿では、石川県小松市松岡町方言における形容詞（イ形容詞）・形容動詞（ナ形容詞）の活用について、臨地調査の結果に基づき記述する。

この調査の当初の目的は、主に形容動詞の活用について記述することであった。『方言文法全国地図』（以下、GAJ）第3集150図「静かなら」において、この地点では「シズカナケリヤ」という形式が回答されている。西日本の一部で形容動詞の過去形や仮定形が「～ナ＋形容詞活用語尾」という形をとることは、GAJや各地域方言の記述的・言語地理学的研究によってすでに知られている。筆者は富山県朝日町笹川の方言を対象に、これらの形を含めた形容動詞の活用について記述的研究を行なったことがあり（小西2001）、そこに見られた現象が、同様の形を持つ他の方言にも共有されるかどうかを確認するために、この小松市松岡町における調査を計画した。幸い、GAJと同一のインフォーマントの協力が得られたが、調査を行なってみると、形容動詞だけでなく形容詞の活用においても興味深い現象が見られることが分った。すなわち、語幹末母音が a の形容詞において、終止・連体形が「タケー（高い）」など連母音 ai が ee に融合した形をとり、また、連用形が「タコテ（高くて）」などウ音便形をとるとともに、推量・過去・仮定形でも「タケカロー・タケカッタ・タケケリヤ」「タコカロー・タコカッタ・タコケリヤ」のような語幹末母音が e や o に置き換わった形が見られるのである。

本稿では、こういった点を中心に、小松市松岡町方言における形容詞・形容動詞の活用について、通時的な考察を交えながら、共時的な記述を行なう。

2 調査の概要

2.1 調査地域とその方言について

石川県の方言は、方言区画論上、西部方言の中の北陸方言に属す。県内の方言区画は「能登」と「加賀」に大きく分けられるが、小松市は「加賀」のうち、「北加賀」（河北郡、金沢市）や「白峰」と区別されて「南加賀」に属すとされる。「南加賀」は、さらに、石川郡・能美郡・小松市による「湖北」と加賀市・江沼郡による「湖南」に分

けられる(岩井1961, 川本1983。市郡名は川本1983の記述のまま)。

調査地点である松岡町は、^{ごうだに}郷谷川の^{みつたに}支流三谷川沿いにある山間の集落で、その方言は、小松市街地とは若干異なる特徴を持つと予測される。ただ、ここで記述する特徴の多くは、松岡町内より広い地域に見られる可能性がある¹。しかし、今回の調査は、松岡町の高年層男性話者一名を対象としたものであり、その結果がどのくらいの範囲の地域に共通して認められるのか判断できなかった。そのため、本稿では、記述・考察の対象を「小松市松岡町方言」としておく。

小松市の方言に関しては、最近、加藤和夫によって、音韻・文法・語彙など方言全般にわたる記述的研究・言語地理学的研究や自然談話の文字化が行なわれている。本稿の地点・テーマに関しては、特に、小松市西南部の^{おおすぎだに}大杉谷川流域の方言(加藤1997)、^{かすかみ}郷谷川・^{かすかみ}湊上川流域の方言(加藤1998)についての記述的研究が参考になる。関連する記述については、調査結果とともに触れる。

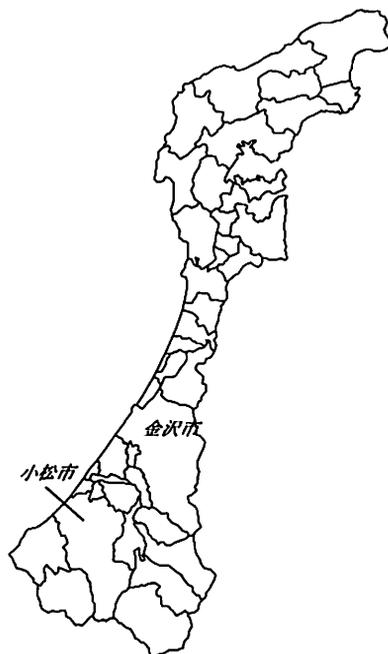


図 1: 石川県(市町村境界は2001年時)

2.2 調査について

インフォーマントは以下のとおり。

木本 喜代一(きもと きよかず)氏。大正3(1914)年生まれ、男性。

前述のように、GAJのインフォーマントと同じかたである²。木本氏は、言語形成期の後に県内他地域や富山市で約6年生活したほかは、ずっと松岡町で生活している。職業は教員であった。父親は松岡町、母親は隣の^{いけのじょう}池城という集落の出身である。妻は幼少期に大阪で生活したことがあるが、妻の両親は松岡町の出身である。

調査期間は2001年11月～2005年3月。面接式の質問調査で、共通語の文・形式を方言訳してもらった質問項目が主である。

¹加藤(1998:94)は、小松市程度の地理的範囲で地域差の見られる文法事象はほとんどないと予想されたが、調査の結果、打消過去表現「～なかった」など地域差の確認できた項目もわずかにあったとしている。

²本稿でGAJとの関わりについて触れるとともに改めて氏名や経歴を記すことについては、口頭でご本人の許可を得た。

3 形容詞の活用

3.1 活用体系

形容詞の活用を表1に示す。方言形はローマ字による音韻表記で記した。右列に各形式の文法的機能・意味や後続形式を記した。

表 1: 小松市松岡町方言における形容詞の活用

終止形3モーラ以上		終止形2モーラ			語幹(意味)
語幹末a taka (高) sukuna (少)	語幹末a以外 siro (白) usu (薄)	ko (濃)	jo (良)	na (無)	
-i ~e	-i	-i -oi	ee	-i ~e	終止(-い。) 連体(-い+体言)
-karoo =karoo Δ ~karoo Δ	-karoo	-okaroo	-karoo ekaroo Δ eekaro Δ	-karoo ~karoo Δ	推量(-いだろう) #1)
-kaq =kaq Δ ~kaq Δ	-kaq	-okaq	-kaq ekaq Δ	-kaq ~kaq Δ	+ta (-かった: 過去)
-kerja =kerja Δ ~kerja Δ	-kerja	-okerja	-kerja ekerja Δ	-kerja ~kerja Δ	仮定(-ければ) #2)
= =o Δ	-	-o -oku	-o	=o	+te (-くて: 中止)
= =o Δ	-	-o	-o	×	+nai/nee (-くない: 否定)
= =o Δ	-	-o	-o	=o #3)	+naru(-くなる)
- = Δ	-	- -o	- -o	-sa	+sujiru (-すぎる)
- = Δ	-	-o	-sa	-sa	+sooja/soona (-そうだ: 様態)

- : 語幹

= : 語幹末母音を o に変えた形 例) taka → tako

~ : 語幹末母音を e に変えた形 例) taka → take

Δ : 一部の語にのみ用いられる, 判断がゆれるなど, 不安定な形

× : 該当する形なし

注1) 推量表現には<終止・連体形+jaroo>もある。

注2) 仮定表現には<過去形+tara>もある。

注3) <終止・連体形+nani><終止・連体形+jooni>もある。

下に調査した語を示す³。()内は意味的に対応する共通語である。

- 終止形3モーラ以上, 語幹末母音/a/
aka-i (赤い), ita-i (痛い), taka-i (高い), haja-i (早い), jowa-i (弱い),
mizika-i (短い), sukuna-i (少ない)
- 終止形3モーラ以上, 語幹末母音/i,u,o/
uresi-i (嬉しい), tanosi-i (楽しい), otorosi-i (恐ろしい),
mezurasi-i (珍しい), usu-i (薄い), oo-i (多い), siro-i (白い),
too-i (遠い), omosiro-i (面白い)
- 終止形2モーラ
ko-i (濃い), ee (良い), na-i (無い)

終止形が3モーラ以上の形容詞は比較的規則的に活用するが、終止形が2モーラの形容詞では語ごとに異なる不規則な活用となる。この点は、近隣の金沢方言や富山県内の諸方言と似ている(小西2004)。ただし終止形が3モーラ以上の形容詞も一律ではなく、語幹末母音が a の場合⁴と a 以外(i, u, o)の場合⁵とで異なる。以下では、まず3モーラ以上の形容詞について述べ、次に2モーラ形容詞について述べる。

(1) 3モーラ以上の形容詞

終止形が3モーラ以上で語幹末母音が a 以外の場合は、語幹に語尾・接辞等を接続させて文法的な形が作られ、非常に単純な活用である。語幹末母音が a の形容詞では、

³形容詞のアクセントについては、調査時に語形の誘導を行なったものや使用の有無を確認しただけで発話を求めなかったものもあるため、詳しく記述するだけのデータがないが、終止形に限り調査で得られたことを簡単に述べておく。加藤(1997, 1998)によると、大杉谷町方言では、2拍語「無い」は○●、3拍語「痛い」「厚い」は●○○、「高い」「長い」「背い」「暑い」は○●○、4拍語「苦しい」「危ない」は○●●○であり、尾小屋町方言では、2拍語「無い」(「ネー」と発音されることも)と4拍語(前2語と「涼しい」)については大杉谷町と同様で、3拍語では調査した7語(前6語と「丸い」)全てが○●○で、うち「高い」では●○○も聞かれたという。今回の調査では、特に3拍語の多くでアクセント型にゆれが見られ、ちょうど型の区別が失われつつある段階なのではないかと思われた。下降の有無・位置を弁別の特徴とみなしてその位置で型を示すと、2拍語「濃い」はコイ、コーイ、「無い」「良い」は0型(無核型)、3拍語では「赤い」「弱い」「多い」「遠い」で2型のみ、他の語で1型・2型の両方が得られた(「痛い」は1型が主、他は2型のほうが多く聞かれた)。4拍語は、「うれしい」「楽しい」で2型、「少ない」「短い」で3型、「明るい」で2と3の両型が得られた。5拍語は4型であった。

⁴後述のように、この方言ではウ音便形とともに「タコカッタ」「タケカッタ」など、「語幹の挿げ替え」によって生じた形が見られることから、共時的記述として「高い」の /taka/などを「語幹」とすることには注意を要するかもしれないが、本稿では簡便のために終止・連体形語尾 -i の前の母音を「語幹末母音」としておく。

⁵この方言で語幹末母音が e の形容詞の存在は確認できない。また、語幹末母音が i の形容詞で今回の調査で確認したのはいわゆるシク活用形容詞だけである。「大きい」は調査項目に加えていたが「デカイ」を用いることが多いとのことであった。

終止・連体形の語末の連母音 ai が融合することと、連用形でウ音便形をとることに伴い、少し複雑な活用を見せる。以下、活用形ごとにみていく。

(1-a) 終止・連体形

終止・連体形は、共通語と同様「語幹+イ」である。ただし語幹末母音 a の形容詞においては、「タケー」「スクネー」のような末尾の連母音 ai が融合して ee となった形が見られる⁶。方言におけるくだけた表現としては、融合形のほうが用いられやすいようである。この形自体は音韻変化によるものだが、後述するように、この方言では、この融合が活用体系に影響を与えているため、表1でも ~e として活用表の中に位置づけた。なお、語幹末モーラがヤ行の「早い」では [hae:] とア行化するが、ワ行の「弱い」では [jowe:] と、少なくとも音声的には [w] が認められた。ただし「早い」「弱い」ともに、語幹末が a の他の語に比べて融合形が現れにくい。「弱い」の場合は [we] が音韻的に不安定な存在であるために、「早い」の場合は、語幹末モーラの子音すら保たれず、語としての同一性が保ちにくいために、融合形が避けられると解釈できる。語幹末が o や u の場合は、「アカリー（明るい）」など融合形が許容される語もあったが、全体的に非融合形のほうが用いられやすいようである⁷。なお、共通語と同様、終止・連体形に助詞「サカイ／サケ（から）」や「ケド」が下接して原因・理由や逆接の接続表現を作ったり、助詞「カ」が下接して疑問・不定の表現となったりする。

(1-b) 連用形

接続助詞「テ」や否定の形式形容詞「ナイ」、動詞「ナル」が下接する時、語幹末が a 以外の場合は語幹を、語幹末が a の場合はいわゆるウ音便形をとる。動詞「スル」が下接する時も同様である（ただし「痛い」「遠い」「嬉しい」「楽しい」「恐ろしい」「珍しい」のスル下接形は得られていない）。ウ音便が語幹末 a の場合にのみ認められて、i の場合がないという点は金沢方言と同様である（小西2004）。語幹末 a のウ音便形には、「スクノーナイ」のような長音化した狭義のウ音便形もあるが、「タコナイ」のような短音化した形のほうが用いられやすい。特に終止形が3モーラの形容詞では「タコナイ」「イトナイ」などの短音形が普通で、長音化した場合は強調の意味を帯びるようである。終止形が4モーラの形容詞では「ミジコナイ」などの短音形とともに、「ミ

⁶川本(1983:345)は「連母音 ai の融合は、特に南加賀に盛んで、ほとんどの音節が ai → ε の融合を起こす」とする。今回の調査では融合形は /ee/ [e:] であり、ε と表記すべきような広い母音ではなかった。

⁷加藤(1997, 1998)は、小松市大杉谷町や尾小屋町では、ai の融合形とともに、oi や ui でも「クデー（くどい）」「ヒデー（ひどい）」「ワリー（悪い）」といった融合形の例が見られるとする。今回の調査ではこの3語は未確認である。ai に比べて oi, ui の融合が起こりにくいという点については、今回の結果と加藤(同上)の記述に矛盾はないと言える。

ジコーナイ」などの長音形も強意のニュアンスを伴わずに用いられるようである⁸。なお、「弱い」においては、[jowonai]（弱くない）などのウ音便短音形も可能だが、「ヨワクテ」「ヨワクナイ」のようなク形が他の語に比べて現れやすい。これも、[wo]が音韻的に不安定であるために避けられるということであろう。このク形が、古くから存在していたものなのか、最近になって共通語から受容されたものなのかは判断できない。中止としてはテ形が用いられ、ウ音便形単独が使われることはない。

ナル・スル以外の動詞を副詞的に修飾する際の形（以下「副詞形」としては、「タカイガニ／タケーガニ アゲル（高く上げる）」「ミジケーガニ ケズル（短く削る）」「ハイガニ アルク（早く歩く）」など、「終止・連体形+ガニ/ɲani/」の形がもっとも安定して用いられる。これは、この方言の形容詞の活用において特徴的な点の一つである。小西(2004)で記述したように、金沢方言でも用いられるものであり、「ガニ」は、「準体助詞ガ+助詞ニ」に由来する。「短く削る」などの結果の副詞としても「早く歩く」などの様態の副詞としても用いられるが、「早く帰る」のような時間関係の副詞としては用いられない。この点も金沢方言と同様である。副詞形としては、ほかに、共通語形と同形の「ミジカク ケズル」などのク形も回答された。「タコー アゲル」などのウ音便形も語によっては回答されたが、安定して用いられる形とは言いがたい。「タコ」などの短音形はさらに許容されにくく、明確に回答されたものはなかった⁹。また、金沢方言では、「タコラト」など接辞「ラト」を用いた形もあるが、松岡町では使われない。

(1-c) 推量・過去・仮定形

推量・過去・仮定の形としては、語幹にそれぞれ「カロー」「カッタ」「ケリャ」が下接した「タカカロー」「タカカッタ」「タカケリャ」などの形がもっとも安定して現れる（ただし、表1にも注記したように推量表現には「終止・連体形+ヤロー」、仮定表現には「過去形+タラ」もある）。注目すべきは、表1で△を付して示したように、「タコカロー」「タコカッタ」「タコケリャ」など語幹末母音がoに置き換わった形（ウ音便短音形と同じ形）、「タケカロー」「タケカッタ」「タケケリャ」など語幹末母音がeに置き換わった形が、不安定ながら用いられる点である。

末尾oの形は、終止形が4モーラの語よりも3モーラの語で現れやすい（すなわち、短い語のほうが現れやすい）という傾向があるが、同じ長さの語でも「高い」「赤い」

⁸この不均衡についてはうまく説明できないが、後述する「語幹の挿げ替え」と関係があるかもしれない。

⁹村上(2003)によると、ウ音便短音形は、近世後期上方語資料でも「ない」「なる」や「ござります」等の補助動詞が下接する場合に多く、一般動詞が下接する例は少ないという。ただし、近世後期上方語では「テ」に下接する場合にも短音形が避けられるといい、この点は松岡町方言と異なる。

「早い」のほうが「痛い」よりも許容されやすいという違いがある。また「弱い」にはこの形がなく、「ヨワカロー」など語幹に接続する形のみである。

「タケカロー」などの末尾 e の形は、末尾 o の形よりもさらに不安定で、4モーラ語では全く許容されない。短い語のほうが現れやすいという点では、末尾 o の形と共通すると言える。また、「高い」「赤い」のほうが「痛い」よりも許容されやすい点も末尾 o の形と似る¹⁰。「早い」「弱い」はこの形を持たない。

(1-d) 「～スギル」「～ソーヤ/ソーナ」

動詞化接辞「スギル」、いわゆる様態の助動詞「ソーヤ/ソーナ」も、語幹に接続した「タカスギル」「タカソーヤ」などの形が基本だが、「タコスギル」「タコソーヤ」など、語幹末が o に置き換わった形も許容される（語幹末 e の形はない）。こちらのほうが、先の推量・過去・仮定形より、4モーラ形容詞で許容されやすいようである。ただし、「弱い」は語幹に接続する形のみである。

GAJ第3集の形容詞の活用項目における松岡町の回答は、次のとおりである。見出し語形をカタカナに直して示す。調査は1981年である。

136図	高い(物)(連体形)	タカイ
137図	高くない(否定形)	タコネー
138図	高くて(～て形)	タコーテ
139図	高くなる(～なる形)	タコーナル, タコナル
140図	珍しくなる(～なる形)	メズラシューナル
141図	高かった(過去形)	タカカッタ
142図	高いだろう(推量形)	タカイヤロー
143図	高ければ(仮定形1)	タカケリヤ, タカカッタラ
144図	高いなら(仮定形2)	タカインナラ, タカイカ°ナラ, タカイカ°ヤッタラ

GAJでは大杉谷川上流の小松市赤瀬町も調査地点となっている。赤瀬町では137～139図でそれぞれ「タコーナイ」「タコーテ」「タコーナル」が、140図で「メズラシナル」が回答されている。

また、加藤(1997, 1998)によると、小松市大杉谷町では「高い」が、タカカッタ（高かった）、タコナル（高くなる）、タコネー（高くない）、タコテ（高くて）、タカイ・タケー（高い）、タカイ・タケー ヤマ（高い山）、タカイヤロ・タカイジャロ（高いだろう）、タカイサケ（高いから）、タカケリヤ（高ければ）と活用し、同市尾小屋町で

¹⁰ 今回の調査結果の限りでは、語幹末モーラがタ行のものよりもカ行のものの方が許容されやすいように見えるが、その音声的な理由が見出しがたい。

は「早い」が、ハイヤロー（早いだろう）、ハヤカッタ（早かった）、ハヨナル（早くなる）、ハヨーナイ（早くない）、ハイ（早いく言い切り）、ハイヒト（早い人）、ハイケ^o トー（早いんだって<伝聞>）、ハイサケ（早いから）、ハヤカッタラ（早ければ）、ハヤケリヤ（早ければ）と活用するという。

今回の調査結果とGAJとを対照すると、今回は、母音連続 ai の融合形や推量・過去・仮定形における併用語形など、話者の文法的判断が不安定なものも含めて、全体的に使用語形のバリエーションが広がったと言える。また、テ・ナイ・ナル下接形については、GAJでは「高い」においてウ音便長音形と短音形が混じって回答され、「珍しい」においてウ音便形が回答されている点で今回の調査結果と異なる。今回の調査結果は、むしろ加藤(1997)による大杉谷町方言に一致すると言える。このような異同が生じた原因の一つとしては、約20年の間に言語変化が進んだという可能性があるが、現在のデータからその真偽は確認できない。むしろ、今回の調査が数回に渡るものであり、GAJや加藤(1997, 1998)の調査結果を参照して予想語形の使用確認を行なうよう努めたことが大きいだろう。

(2) 2モーラの形容詞

終止形が2モーラの形容詞で確認できたのは、「濃い」「良い」「無い」のみであった¹¹。

「濃い」の活用は、「白い」などの3モーラ以上・語幹末 a 以外の形容詞の活用に似るが、語幹が長音化して「コー」となる形が用いられる点異なる。テ形では語尾ク^oの形も現れるが、その場合も「コーク」となる。「濃い」における語幹の長音化は、金沢市や富山県内の方言でも観察される（小西2004）。副詞形としてウ音便形は用いられず、「コイガニ／コーク ヌル（濃く塗る）」のように「～イガニ」や「～ク」が用いられる。

「良い」は、jo を語幹とする形と e を語幹とする形が混じる。終止・連体形では後者の「エー」のみで、推量・過去・仮定形では両者が併用され、テ・ナイ・ナル下接時には jo を語幹としたウ音便形「ヨー」のみとなる¹²。副詞形では「エーガニ／ヨー／ヨク ハナス（く人のことを実際の姿よりも）良く話す）」のように、「～イガニ」・ウ音便形・ク形が用いられる。様態の「ソーヤ」が下接する時「ヨサ」となるのは共通語と同じである。

「無い」は、終止・連体形で融合形「ネー」が用いられる点、テ・ナル下接形でウ音

¹¹金沢市や富山県内で「酸い」「憂い」という2モーラ形容詞が得られたが、今回のインフォーマントはこの2語とも使用しないという。助動詞「たい」は未調査。

¹²終止・連体形「エー」は「ヨイ」の融合形とも考えられるが、3モーラ以上の形容詞で oi の融合があまり起こらないこと、e が音声的には [i] に近く実現されることもあることから、そうみなさなかつた。

便形をとる点、推量・過去・仮定形で「ネカロー」など語末が e の形が用いられる点で、他の語幹末が a の形容詞と似ている。ただし、推量・過去・仮定形で「ノ（一）」は現れない。また、ナルおよびスルが下接する時、ウ音便形とともに「ナイガニナル」「ナイヨーニナル」（なくなる）、「ナイガニスル」（なくす）のように「～イ+ガニ/ヨーニ」が用いられる点は、他の形容詞にはない特徴である（ただし「～イヨーニ」はスル下接時には用いられにくい）。この点は金沢・富山方言と同様である（小西2004）。「スギル」「ソーヤ」が下接する時に「ナサ」となるのは共通語と同じである。

なお、形容詞や名詞述語の否定表現で用いられる形式形容詞「ない」も、形容詞「無い」にほぼ準じた活用をする。「高くない」を例として得られた形を次に示す。ナル下接形で「タコノーナル」が用いられない点、スル下接形で「タコネーヨーニスル」が用いられる点は形容詞「無い」と異なる。

高くない	takonai, takonee
高くないだろう	takonakaroo, takonekaroo Δ
高くなかった	takonakaqta, takonekaqta Δ
高くなければ	takonakerja, takonekrja Δ
高くないで	takonoote
高くなる ^{注1}	takoneejaninaru, takoneejooninaru
高くなる ^{注2}	takoneejanisuru, takoneejoonisuru

Δ: 判断がゆるるもの

注1: 「物の値段がそれほど～」 注2: 「物の値段をそれほど～」

3.2 連母音の融合と語幹の挿げ替え

すでに強調してきたように、松岡町方言の形容詞の活用において特徴的なのは、語幹末母音が a の形容詞において、「タカカロー」「タカカッタ」「タカケリャ」「タカスギル」という形とともに、不安定ながら「タコカロー」「タコカッタ」「タコケリャ」「タコスギル」のような末尾が o に置き換わった形や、「タケカロー」「タケカッタ」「タケケリャ」のような末尾が e に置き換わった形が並存するという点である。これらの形は、どちらも大西(1997)のいう「語幹の挿げ替え」という過程を経て生まれたと考えられる。

GAJ第3集136～144図やその分布に基づく大西(1997)の論などによって、大分などで「タコカッタ（高かった）」等の形が見られ、東北地方や長野の一部などで「タケカッタ（同）」等の形が見られることが知られている。従来「無活用化」と呼ばれること

もあったこれらの形を、大西(1997)は、連母音の融合によって複雑になった活用体系を「整合化」させるために語幹を「挿げ替え」て生れたものと論じた。すなわち、東北地方などに見られる「タケカッタ」「タケクテ」「タケケレバ」などの形は、終止・連体形が ai > ee という音韻変化を蒙り takai > takee などとなることによって語幹が taka と take の間で浮動して体系性がゆらいでしまうため、これを整えるために、融合によって発生した母音を語幹に取り入れて生まれたものだという。また、連用形に takoote などのウ音便を持つ方言においても、語幹が taka で一貫せず tako の形が現れてしまうために、takokatta や takokereba のような語幹を挿げ替えた形を生み出して体系の整合化がはかられたとする。

小松市松岡町においては、この二種の「挿げ替え」がともに起こっていると考えられる。短い語ほど「挿げ替え」が起こりやすいのも、この変化が、語幹が保たれなくなることを、さらに言えばそのために語としての同一性が保たれなくなることを避けるためのものだからだろう。

また、大西(1997)の論では、「タコカッタ」などのウ音便形への挿げ替えが、なぜ推量・過去・仮定形に起こって終止・連体形に起こらないのか(なぜ「タコイ」という形を発生させていないのか)については十分説明されていないが、松岡町方言に関する限り、その説明も可能だと思われる。次節で見るように、この方言では、形容動詞の推量・過去・仮定表現において「シズカナカロー」「シズカナカッタ」「シズカナケリヤ」といった「～ナ+形容詞活用語尾」をとる。また、動詞の否定辞「ン」においても、過去形「～ンカッタ」(「～ナンダ」「～ンダ」との併用)、仮定形「～ンケリヤ」(「～ナ」との併用)と、「～ン+カッタ/ケリヤ」の形が見られる(推量形「～ンカロー」は得られていない)。形容詞のカリ活用語尾「カロー」「カッ(タ)」は、歴史的には「連用形～ク+動詞アリ」が縮約したものであり、已然形「ケレ」もそれに由来すると言われているが、この方言では、再分析によって「カロー」「カッタ」「ケリヤ」が取り出され、それらが形容動詞や否定辞「ン」を活用させる付属的な用言のように機能している。形容詞のウ音便形はもともと連用形であるため、「語幹の挿げ替え」は、終止・連体形より、付属用言的な「カロー」「カッタ」「ケリヤ」が続く場合に起こりやすかったと解釈できる。また、さらに類推によって「スギル」「ソーヤ」といった動詞化接辞や助動詞にまで挿げ替えが起こったと考えられる。

一方、「タケカロー」等の形については、ai > ee という音韻変化に伴って takai > takee 等の終止・連体形が生じたことから、類推によって、終止・連体形と同様に語幹に語尾が接続していた推量・過去・仮定形でも takakaroo > takekaroo といった変化

が起こったと考えられる。テ・ナイ・ナルなどの連用形には、すでにウ音便によって語幹末が *o* に変化した形が用いられていたもので、そこまで類推が及ばなかったと解釈できる。

ただし、松岡町方言においては、推量・過去・仮定形における「タコ」や「タケ」の「挿げ替え型」は、元来の語幹「タカ」を用いた形に比べて極めて不安定な存在である。現在は挿げ替えの初期段階、変化の萌芽的な状態であると言えよう。

また、大西(1997)は、一部の方言におけるシク活用形容詞の「メズラシ(一)ナル」などの形も、ウ音便によって活用体系に本来なかった母音が入り込んで体系性が崩れることを避けるための「整合化」の一つと見る。村上(2002, 2003)は、シク活用形容詞の「～シナル」や「大きい」の「オオキナル」といった形は、ウ段拗音「シュ」「キュ」が音韻的に不安定であったために生じたもので、語幹保持という作用はその形の継続のために二次的に働いたとみている。現在の松岡町方言の形容詞活用体系の成立に、「語幹保持」あるいは「活用体系の整合化」という要因が働いたことは間違いないだろうが、語幹末が *i* の場合にはウ音便が起こらず *a* の場合にのみ起こることを考えると、村上(同)のいう音韻的な要因も関与した可能性がある。

4 形容動詞の活用

形容動詞の活用の概要を、名詞の述語形式や連体表現、形容詞の活用（もっとも単純な3モーラ以上・語幹末 *a* 以外の語を例とする）とともに表2に示す。表記等については表1と同様であるが、活用形の提示順は異なっている。

調査した語は次のとおりである。ただし、「好き」以下の語は、終止法としては用いにくい。この点については後述する。

sizuka(静か), raku(楽), genki(元気), sinpai(心配), taqsja(達者),
suki(好き), kirai(嫌い), ija(嫌), muri(無理)

なお、伝聞の「ソーヤ／ソーナ」(終止形接続)、様態の「ソーヤ／ソーナ」(連用形接続)、「ヨーヤ／ヨーナ」(連体形接続)といった共通語で形容動詞型の活用を持つ助動詞も、表2に準じた活用をする。

表2から分かるように、この方言の形容動詞の活用は次のような点に特徴がある。

- 「～ナ」の形が連体法だけでなく、終止法や、理由・逆接の接続助詞や伝聞の助動詞が後接する場合、助詞の「カ」「ヤラ」が後接する場合も、名詞述語と同じ形とともに使われる。「～ナ」形の用法の範囲は、形容詞の「～イ」形の範囲と等しい。

- 推量・過去・仮定表現において、名詞述語と同形の「～ヤロー／ヤッタ／ナラ」の形とともに、「～ナカロー／ナカッタ／ナケリヤ」という「～ナ+形容詞活用語尾」が使われる。

共通語の形容動詞は、物の状態・属性や人の感情を表すといった意味的特徴、また、程度副詞で修飾しうるなどの統語的特徴では形容詞に近いが、形態論的には連体修飾の形が「～ナ」である点を除いて、名詞の述語形式（名詞+断定の助動詞ダ）と同じように振る舞うことから、品詞論上しばしば問題とされてきた。上の二つの特徴から、この方言の形容動詞は、形態論的な面で共通語の形容動詞よりも形容詞に近づいていると言える。

形容動詞の「～ナ」が終止形としても使われるという特徴、および「～ナ+形容詞活用語尾」という形があるという特徴は、西日本（北陸・東海・中国・四国地方）の一部に見られることがGAJ第3集等の先行研究によって知られている。小西(2001)は、このような方言のうち富山県下新川郡朝日町笹川方言を対象として、その形態・統語論的記述を行なった。表2に示した小松市松岡町方言の形容動詞の活用のしかたは、小西(2001)の示した富山県朝日町笹川方言の形容動詞とよく似ている。笹川方言では、「～ナ+形容詞活用語尾」の形は「シズカ'ナカロー」「シズカ'ナカ'ッタ」（'は下降

表 2: 小松市松岡町方言における形容動詞の活用

形容動詞 sizuka (静か)		名詞 hon (本)	形容詞 siro (白い)	
-ja	-na	-ja	-i	終止 (-だ)
-jaroo	-nakaroo	-jaroo	-karoo (注1)	推量 (-だろう)
-jaq	-nakaq	-jaq	-kaq	+ta (-だった: 過去)
-nara	-nakerja	-nara	-kerja	仮定 (-なら) (注2)
-	-na	-	-i	+ka (-か: 疑問), +jara (-やら)
-na	-na	-na	-i	+na (-なの: 準体)
-na	-na	-no	-i	連体 (-な+体言)
-de	-de	-de	-te	中止 (-で)
-de	-de	-de	-	+nai/nee (-でない: 否定)
-ni	-ni	-ni	-	+naru (-になる)
-	-	×	-	+sunjiru (-すぎる), +sooja/soona (-そうだ: 様態)

×: 該当する形なし (): 形容動詞における共通語形

注1) <-i+jaroo>もある

注2) <過去形+tara>もある

の位置)のように2アクセント単位になるが、この点も松岡町方言は同じである。ただし、笹川方言では、助詞「カ」「ヤラ」が接続する際には、「シズカナカ」のように「～ナ」に接続する形が普通であるが、松岡町方言では語幹に接続する形も併用される点異なる。

笹川方言では、終止法における二つの形には、対象のあり方についての詠嘆文で「～ナ」が用いられやすく、対象についての話し手の判断を述べる文で「～ジャ」が用いられやすいという違いが認められた。松岡町方言でも「～ナ」と「～ヤ」との間に類似した違いが見られる。(例文中、当該の問題に関わらない部分は共通語形で示す。)

- (1) ここは シズカヤゾ／シズカナゾ。
- (2) (現在いる場所が静かなことに気づいて) ここは シズカヤネー／シズカナネー。
- (3) 今日の仕事は ラクヤ／ラクナ。
- (4) (仕事をしながら隣の人に) 今日の仕事は ラクヤネー／ラクナネー。
- (5) 私はあの人のことが シンパイヤ／シンパイナ。
- (6) («あの人」の様子を見て) あの人 シンパイヤネー／シンパイナネー。

(1) や (3) のような対象(「ここ」「今日の仕事」)の属性・状態に関する話し手の知識や判断を聞き手に伝える文、(5) のような対象(「あの人」)に対する話し手の感情を聞き手に伝える文では、「～ヤ」も「～ナ」も用いられるが、共通語翻訳式の質問で回答を求めると「～ヤ」のほうがまず回答されるなど、前者のほうが用いやすいようである。しかし、(2) や (4) のような対象の属性・状態の程度の高さについて感心して述べる文や、(6) のような対象に対して引き起こされる話し手の感情の程度の高さを述べる文、すなわち感嘆・詠嘆の意味が伴う文では、「～ナ」も用いられやすくなる。

この傾向は次のような文でより明確な差となって現れる。

- (7) あの人はお酒が スキヤゾ／*スキナゾ／キライヤゾ／*キライナゾ。
- (8) 私はお酒が スキヤゾ／*スキナゾ／キライヤゾ／*キライナゾ。
- (9) もうその仕事は イヤヤ／*イヤナ。
- (10) あの仕事は1日では ムリヤゾ／*ムリナゾ。

ただし「好き」「嫌い」「いや」の場合、感嘆・詠嘆の文ではやはり「～ナ」の形が用いられる。

- (11) («あの人」が酒を飲む様子を思い出して) あの人はお酒が スキヤナー／スキナナー／キライヤナー／キライナナー。
- (12) (以前にした仕事を思い出して) あの仕事は本当に イヤヤナー／イヤナナー。

「無理」は語義的に程度の幅を持たないためその状態に対する詠嘆文が考えにくく、「～ナ」による終止法も確認できない。ただし、「無理」においても「ムリナサカイ（無理だから）」「ムリナケド（無理だけど）」のように接続助詞「サカイ」「ケド」が後続する場合には「～ナ」形をとりうる。

過去表現における「～ヤッタ」と「～ナカッタ」の間にも、その差が少し弱くなるとは言え、似たような違いが見られる。

(13) あの人はお酒が キライヤッタ／キライナカッタ。

(14) 私は昔はお酒が キライヤッタ／??キライナカッタ。

(15) あの人はお酒が キライヤッタナー／キライナカッタナー。

(13) のような過去における対象の状態を話し手の知識として述べる場合、「～ナカッタ」も内省では不可能ではないが「～ヤッタ」のほうがまず自然に用いられる。(14) のように自分自身について述べる場合には、「～ナカッタ」が用いられにくい傾向がより強まるようである。しかし(15) のような、過去における対象の状態について詠嘆的に述べる場合には「～ナカッタ」が用いられやすくなる。(これら「過去」の文には、「今は好きだが、昔は嫌いだった」のような過去の一時的な状態を述べる場合と、「あの人」が故人であるなど、「お酒が嫌い」という状態を過去に存在した対象の恒常的な属性として述べる場合とがありうるが、「～ヤッタ」と「～ナカッタ」にはこの違いは関与しないようである。)

一方、推量表現の「～ヤロー」と「～ナカロー」、仮定表現の「～ナラ」と「～ナケリヤ」には明確な意味上の差は見出せない。

坪井(1981)や矢島(1994)などの研究によって、中世から近世期における近畿中央方言（上方語）においても、形容動詞の終止形として「～ナ」と「～ジャ」が併存していたことが明らかになっている。さらに矢島(1994)によれば、近世前・中期上方語の形容動詞文では、「～ナ」は対象の在り方に対する捉え方をそのまま描述する場合に使われ、「～ジャ」は対象を主題として取り立て、それについての知識や本質的な属性、及び思考を経た上での判断などが述べられる場合に使われるという。小西(2001)は、この論を参考に、富山県笹川方言の終止用法の「～ジャ」と「～ナ」について、「～ナ」はテンス・モダリティに関して積極的な意味を持たない形、「～ジャ」は<断定>というモーダルな意味を持つ形であるとした。松岡町方言における「～ナ」と「～ヤ」についても、同様に考えることができるであろう。

また、小西(2001)では、笹川方言の「～ナ+カロー／カッタ／…」がアクセント的に2単位となる点などから、「カロー／カッタ／…」は、形容動詞自体の活用語尾とい

うよりも、テンスやムードの分化のために必要とされる付属的な用言と解釈できるとしたが、この点においても松岡町方言は同様に考えてよいだろう。前述のように「カロー／カット／ケリヤ」を付属的な用言ととらえることによって、形容詞の「語幹の挿げ替え」現象も説明しやすくなる。

GAJ第3集145～150図の形容動詞の活用項目では、150図「静かなら」において「シズカナケリヤ」が「シズカナラ」「シズカヤッタ」とともに回答されているが、終止形における「～ナ」や推量・過去形における「～ナ+カロー／カット」は回答されていない¹³。この違いは、形容詞の場合と同様、今回の調査が数回に渡るものであり、予想形式の確認を行なうよう努めたためであろう。

5 おわりに

最後に本稿の論点をまとめるとともに、今後の課題について述べる。

松岡町の形容詞に関しては、特に、語幹末母音が a の場合、終止・連体形が「タケー」など連母音融合形を持つこと、また、連用形が「タコナイ」などウ音便短音形を持つことに伴って、推量・過去・仮定形でも「タケカロー」「タケカット」「タケケリヤ」や「タコカロー」「タコカット」「タコケリヤ」といった、語幹末母音が e や o に置き換わった形が見られる点に注目した。本稿は、近隣の金沢方言や近世上方語との共通点・相違点に触れはしたものの、あくまでも、松岡町という一方言を対象とした記述と考察に留まるものである。諸方言の記述的研究、言語地理学的な研究や、近畿中央語の文献を対象とした記述や変化過程に関する研究を見渡した上で、改めて形容詞連用形のウ音便にまつわる諸現象・諸変化の、全体的な傾向と時代・方言による相違について考察を行なうことが必要であろう。

形容動詞に関しては、終止形で「～ヤ」とともに連体形と同じ「～ナ」の形が、推量・過去・仮定形としても名詞述語と同じ形とともに「～ナ+形容詞活用語尾」が使われること、終止法の「～ナ」と「～ヤ」には、前者は詠嘆文で用いられやすく、後者は対象についての話し手の判断を述べる文で用いられやすいという違いがあることを述べた。今回の調査では、連体形が「～ナ」の形のみをとるものに限ったが、形容動詞の品詞論的な議論においては、しばしば「～ナ」と「～ノ」の両方の連体修飾形を持つ語が存在することも問題とされる（最近では加藤2003など）。松岡町方言や笹川方言など、「～ナ」による終止法や「～ナカット」等の形が見られる方言において、連体形で「～ナ」と「～ノ」の両形を持つ語がどのように活用するかについても今後確

¹³加藤(1997, 1998)の大杉谷町・尾小屋町の記述でもこれらの形の存在には触れられていない。

認する必要があるだろう。

引用文献

- 岩井隆盛(1961)「方言の実態と共通語化の問題点 富山・石川」『方言学講座』3 東京堂出版
- 大西拓一郎(1997)「活用の整合化—方言における形容詞の「無活用」化, 形容動詞のダナ活用の交替などをめぐる問題」加藤正信(編)『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 加藤和夫(1997)「石川県小松市大杉谷川流域の方言」『小松市立博物館研究紀要』33号
- 加藤和夫(1998)「石川県小松市郷谷川・湊上川流域の方言」『小松市立博物館研究紀要』34号
- 加藤重広(2003)「形容動詞か名詞か」『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 川本栄一郎(1983)「石川県の方言」『講座方言学』6 国書刊行会
- 国立国語研究所(編)(1993)『方言文法全国地図』第3集 大蔵省印刷局
- 小西いずみ(2001)「富山県佐川方言における形容動詞述語形式—名詞述語と異なる「～ナ」「～ナクッタ」等を中心に—」『国語学』52巻3号
- 小西いずみ(2004)「富山・金沢方言における形容詞の副詞化接辞「ナト・ラト」と「ガニ」—方言にみられる文法化の事例—」『社会言語科学』7巻1号
- 坪井美樹(1981)「形容動詞活用語尾と断定の助動詞—歴史的変遷過程における相違の確認—」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店
- 村上 謙(2002)「近世後期以降の上方における形容詞ウ音便の変化形について」『国語と国文学』79巻3号
- 村上 謙(2003)「近世後期上方における形容詞ウ音便の短呼形について」『国語国文』72巻7号
- 矢島正浩(1994)「近世前・中期上方語における形容動詞文一ナ終止・ジャ終止の表現性をめぐって—」『国語学』176号

付記

お忙しいなか何度にもわたって松岡町方言についてお教えくださった木本喜代一氏, また木本氏をご紹介くださった小松市教育委員会, 加藤和夫氏(金沢大学)に深くお礼申し上げます。本稿は, 平成14～15年度科学研究費補助金(若手研究B)「日本語諸方言の形容動詞述語形式に関する研究」(課題番号14710294), 平成16年度科学研究費補助金(基盤研究B1)「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」(課題番号1431019, 研究代表者:大西拓一郎)による成果の一部である。

(こにし いずみ・東京都立大学助手, 東北大学大学院生)